

古代・中世の教理史における死と葬儀¹⁾

片 山 寛

1. はじめに

今日は、「死と葬儀」の問題をご一緒に考える「実践神学セミナー」だということで、私も参加させていただきました。しかし私の専門は「実践神学」ではなくて「教理史」でありますので、キリスト教の歴史をふりかえって、これまでどんなふうにかこの「葬儀」の問題は考えられてきたのか、ということから、ささやかな問題提起をしたいと考えております。

他の多くの主題についても同じことが言えるのですが、そして特にこの「死と葬儀」という主題については、古代から中世にかけて、キリスト教の教理はだんだん発展して形を整えられ、葬儀の様式もある意味では洗練され、またある意味では様々な世界観や神話を付け加えられて壮麗で豊かなものになり、そして近代になってからは簡略化され、省略され、神話や物語からは切り離され、やがて忘れ去られてきた、ということが言えます。特にそれは、葬儀とその形式について言うことができます。

私は、この近代の「葬儀簡略化・死の非神話化」の歴史そのものは、ある意味で必然的とも思われますので肯定します。中世の「葬儀」や「死の作法」は、中世キリスト教社会やそこでのキリスト教的世界観そのものと強く結びついておりまして、ある意味では煩雑でもあり、あまりにも形式主義的でもあり、そのままでは到底、近代社会では実行できないものであったからです。

1) 本論文は、2007年9月11日に行われた、日本バプテスト連盟宣教研究所・西南学院大学神学部学生会の共催による実践神学セミナー「死と葬儀を考える」(福岡市室見の神学寮集会室)で行われた私の講演に、多少の加筆を加えたものである。

「煉獄」purgatorium という言葉がございますが、死後人間が行く三つの世界のひとつで、天国と地獄の間にあって、生前の罪の償いをする場所だとされております。西欧の中世後期の人々は、この煉獄というのを信じていたわけですが²⁾、今ではカトリック教会でも、あまりこの煉獄ということは言いません。宗教改革者たちが批判しましたように、こうした死後の世界についての世界観は、カトリック教会による世俗支配とも結びついていました。ですから、いわゆるキリスト教社会が崩壊して世俗化されてくるとともに、キリスト教の葬儀もまた世俗化されてきたのです。私は、それは肯定します。けれども、最後の「忘却」は肯定しません。それは、宗教改革者たちがそれを批判し³⁾、簡略化した理由を見失わせ、そこにあった近代の精神そのものの喪失を意味するからであります。

現在では、ある意味で復古的な、liturgical な儀式が好まれ、その方向に全体としては流れていると言えます。それはたとえば、結婚式や葬儀における牧師のガウン着用、式文の多用などに示されています。しかし、そのことによりどこまで神学的な根拠があるのか、あるいはそもそも根拠というようなものはなかったのか、といった点はあまり議論されないままです。神学的な議論がなされないということは、現代における復古主義が底の浅い、一種のファッションのようなものに過ぎないということを意味しており、それがつまりは私たちのポスト・モダン的な状況ということだと思います。

洗練された儀式は — たとえば茶の湯の作法やお花の生け方のように — それに参加する人々に深い満足と安心感を与えるものでありますから、その意味ではたといファッションとしても学ぶ価値はあるかもしれません。しかし神学的な意味の喪失、つまり、ではなぜそのようになされるのか、たとえば、なぜ葬儀において詩編の130編が朗読されたのか、ということが失われたままで、ただ形式的にそれを行ったり、それを否定したりするということは、死の看取りや葬儀や死の意味そのものが、二重にも三重にもますます失

2) ジャック・ル・ゴッフ『煉獄の誕生』法政大学出版局（渡辺香根夫、内田洋訳）1988年。

3) たとえばマルチン・ルターの95箇条提題とその解説を参照。

われてゆくということではない。そのような危機感を、私は抱いております。

以下で私は、古代から中世にかけての、主に葬儀とその形式、そしてそれにつながる「死の作法」、つまり死に方の形式の発展について、素描を試みるわけですが、その前に先ずここで言わなければならないことは、古代以来、神学の世界では、「死」というものは究極的に不可解なものとして捉えられてきたということです。死とは何か、それについては様々なことが語られてきましたけれども、つきつめてみると、不可解なものとしか言えないのです。

2. 「死」の神学はない？

それは言い換えると、「死」そのものは神学の主題にはならないということです。明らかなことは、神さまは死ではないということでした。神さまは死とは反対のもの、すなわちすべての命の源であり、永遠に死ぬことのないもの、死とは全く対立する方でした。にもかかわらず、神さまは私たちに死を与える方でもあります。死は神さまと深く関わり合っているのです。なぜそのようなのか。どうして神さまがおられるのに、死があるのか。死はいったい私たちの罪に対する罰なのか、それとも何か深いところで祝福であるのか。それはもちろん様々な仕方、キリスト教の中では語られ、説明されてきたわけですが、しかしそれでも「死」というものは、私たちにとって最後まで不可解な謎であり、謎でありつづけるのです。死そのものは、端的に言って神様の秘義に属することがらであって、私たちがその意味を最後まで語ることが許されないという側面があります⁴⁾。つまりその意味で「死

4) Cf. Beltold Klappert, “Sokrates überwand das Sterben, Christus überwand den Tod — Dietrich Bonhoeffer über Sokrates und Christus” in: *Legenda aurea noviter collecta*. Festgabe für Dr. Karl-Heinz Pridik anlässlich seiner Emeritierung als Dozent für Antike Philosophie und Geistesgeschichte und Lektor für Griechisch und Latein an der Kirchlichen Hochschule Wuppertal, hg. vom Rektorat der Kirchlichen Hochschule Wuppertal unter Mitarbeit des Sekretariats und eines Kollegen. 2005, S.158-166. この講演を私はクラッパート教授の滞日中の講演で聞いた。この講演は2009年の夏に、わが僚友天野有教授の訳によって刊行される予定である。

の神学」というものはありませんし、たまたもしそのような神学があったとすると、それは神さまに代えて死神を礼拝する危険があります。

それにもかかわらず、死とは何かということを私たちは語らざるをえませんし、手探りするような状態ではありますが、その問題を忘れてしまうことはできません。**Memento mori** という中世の格言があります。「死を忘れるな」、それを忘れてしまうと、私たちは神さまも忘れてしまう傲慢に陥る危険があります。ですから私たち人間は、死を何か対象化して考えることもできず、しかし忘れることもできないという状況に置かれているわけであります。

トマス・アクィナスは、人間が身体を持って生きる以上、死は必然的だと述べています。私たちの身体は不完全なものだからです。しかしなぜそのようにして人間は、身体の滅びを通してのみ、神さまの究極的な救いに与るのか、ということについては沈黙を守ります。トマスもまた、この大きな問題を前にして、人間に語ることのできる限界を守るのです⁵⁾。「死」について神学的に言えるのはただ、神さまは死を克服された、イエスは死に対して勝利されたということだけであり、またそれだけで、私たち人間にとっては十分であるのかもしれませんが。そしてこの後者のような、私たちが人間であること、そのことを確認するような意味での「死の神学」は、必要なものであると思います。

3. 古代における葬儀

人間は、死そのものについては語りえない、という側面があります。しかし一方、人間の死に方、あるいは死者の葬儀のあり方については、もちろん古くから繰り返し語られてきました。そのさい、神学的に重要なのは、キリスト教的な死と葬儀についての原型は、当然ながら、イエス・キリスト御自身の十字架であったということです。

神は、キリストの十字架によって、自ら死を引き受けられた。ご自身が人

5) Thomas Aquinas, *Summa Theologiae*, I, 76, 5, ad 1. Cf. A. Zimmermann, *Defectus naturalis und timor*. in: *Miscellanea Mediaevalia*, Bd. 19, S.43-52, S.47.

間として最も苦しい死を受けられ、それによって死に終止符を打ち、死に勝利された。ですから、キリスト教徒にとって、つまり私たち人間にとっては、今もなお死は不可解な謎であり続けるのですが、しかしこのキリストの十字架を思い、十字架の死のさまに倣うことによって、神さまの勝利に預かることができる。それが、古代のキリスト教徒にとって「葬儀」、すなわち死に方と葬り方に関する最初の神学であったのです。ローマ書6章5～9節を朗読します。

5 もし、わたしたちがキリストと一体になってその死の姿にあやかるならば、その復活の姿にもあやかれるでしょう。6 わたしたちの古い自分がキリストと共に十字架につけられたのは、罪に支配された体が滅ぼされ、もはや罪の奴隷にならないためであると知っています。7 死んだ者は、罪から解放されています。8 わたしたちは、キリストと共に死んだのなら、キリストと共に生きることにもなると信じます。9 そして、死者の中から復活させられたキリストはもはや死ぬことがない、と知っています。死は、もはやキリストを支配しません。

「キリストの死の姿にあやかる」^{タナトス モルフェー}、この同じ意味の言葉は、同じパウロのフィリピ書3章10節にも出てまいります。

τοῦ γινῶναι αὐτὸν καὶ τὴν δύναμιν τῆς ἀναστάσεως αὐτοῦ καὶ [τὴν] κοινωνίαν [τῶν] παθημάτων αὐτοῦ, συμμορφιζόμενος τῷ θανάτῳ αὐτοῦ

キリストの死の姿に等しくなる、これが最初期のキリスト教にとってひとつのイメージとしてあったのですが、それにもとづくような、特別なキリスト教的な葬儀の方法というようなものは定められていませんでした。葬儀の具体的な手順では、それぞれの信者の属する民族や地方の習俗に従っており、場所と時期によって非常に異なっていたと考えられております⁶⁾。そもそも、1世紀末から4世紀初めまでの、いわゆるキリスト教迫害時代には、キリスト教全体の葬儀方法を統一するような世界的組織はありませんでしたし、おおびらに特にキリスト教的な死者の祭儀を町中で行えるような状況でもなかったと思われます。

6) *Theologische Realenzyklopädie* (以下 TRE と略記), Artikel: Bestattung, IV. Historisch (von Friedemann Merkel), Walter de Gruyter, 1980, S.745.

ただ言えることは、迫害時代のキリスト者にとって、キリストのために殉教することは、文字通りキリストの死の姿に倣うことであり、それは最も確かな救いへの道であったということです。そのような殉教をとげた死者は、ある意味でキリストと同じような霊的な力を有するものと考えられたので、その遺体は聖なるものとして大切にされました。ローマ時代には一般に、街中に人々を葬ることは、衛生的な理由からも死者の呪いへの不安からも禁止されておりましたので、人々は死者を都市の外にある墓地に葬っていたのですが⁷⁾、ローマを初めとする大都市郊外の地下墓地（カタコンベ）の中には、キリスト教徒の礼拝が行われたと推定される小さなホールが見出されることがあります。これは、迫害の中で人目を避けるために、一般人が恐れて来ない地下墓地に集まって集会したということもあるかもしれませんが、それよりもおそらく、殉教した聖人への尊敬と、彼らの保護を信じたからだという方が強かったと思われます⁸⁾。というのは、4世紀初めに迫害が終わってからも、この地下墓地での礼拝は続いているからです。7世紀ごろまで地下墓地（カタコンベ）は作られ続けていました。その後も、地下墓地ではありませんけれども、こうした聖人を記念し、彼らの遺体や遺骨を地下聖堂 *crypta* に納めた礼拝堂 *cappella*, *basilica* は造られ続けます。

2世紀ごろから、ローマでは火葬がほとんど行われなくなって、土葬がほとんどになるのですが⁹⁾、キリスト教徒も喜んでこの変化を受け入れました¹⁰⁾。イエス・キリスト御自身が、火葬されるのではなく、墓の中に横たえられるという形式で葬られたからです。ここにも、「キリストの死の姿に等しくなる」という最初の原則が生きています。カタコンベのキリスト教徒の遺体は、しばしば顔を東に向けて葬られています。これは、ヨーロッパから見ると東の方角、すなわちエルサレムにおいてキリストの再臨があると信じられて

7) フィリップ・アリエス『死を前にした人間』（成瀬駒男訳）24頁。

8) 同書 26頁。

9) 古代末期の人々は、遺体がなくなると死後の生にさしさわりが生じると考えた。この死後の生活の表象は、キリスト教迫害時代に、人々がキリスト教徒を処刑したときに、彼らを火刑にしたり、遺体を焼却したこととも結びついている。彼らの「死後」を否定しようとしたのである。『ポリュカルボスの殉教』参照。

10) TRE. S.743f.

いたからです¹¹⁾。

ローマ時代の一般的な葬儀と最も異なっていたのは、キリスト教においては、早くから葬儀の主体に教会が加わったということです。当時の通常の葬儀では、日本の葬儀と同じく、死者の家族や一族が葬儀の主体でした。つまり葬儀は家族あるいは一族の行事だったのですが、キリスト教会にとりましては、信者の一人が天に召されたということは、教会の出来事でもありました。古くはオリゲネス（c.185-c.254）に、教会の人々が死者を墓地まで運んだという記事があります¹²⁾。そのさい人々は、讃美の祈りと歌を歌いながら、死者を運びました。

とりわけ迫害時代が終ると、キリスト教会の葬儀は飛躍的に発展を遂げていきます。教會的な葬儀がひとつの典礼 *ritus* として秩序づけられ、全教會的に統一されていきました。

アウグスティヌスの母親モニカが、ローマ近郊の港町オスティアで死去したさい（387年）に、彼の弟子であったエウオディウスは詩編101編を朗読し、家族の人々もこれに唱和したことが述べられています¹³⁾。この当時は、まだ教会での葬儀は行なわれておらず、母親の遺骸はおそらく教会の人々によって家から墓地に運ばれ、埋葬される前に、その土地の習慣で「贖いのいけにえ」が捧げられています。この「贖いのいけにえ」は、おそらく死者のための贖罪の供え物として、主の晩餐式が行われたことを意味しています。といいますのは、ちょうどアウグスティヌスの時代に、ミラノの司教アンブロシウスによって、お墓に食べ物などをお供えすることを禁じるということが始まったわけです¹⁴⁾。おそらくそれは、お供えものが（先祖崇拜のような）異教から来る習慣であったということと、もうひとつは、墓地の中で飲めや歌えの宴会が始まってしまうので、それをやめさせようとしたのだと思われます。飲むなら帰ってから飲め、というわけです。そこでそのお供えの代りにということで、死者のための贖罪の供え物として主の晩餐式を墓地ですと

11) Ibid. この習慣は中世まで続いていた。アリエスの前掲書9頁参照。

12) Origenes, *Contra Celsum*, 8, 30.

13) Augustinus, *Confessiones*, IX, 12, 31.

14) *Conf.* VI, 2, 2；アリエスの前掲書126頁参照。

というのが、信仰深い人々の習慣になりつつあったのだと思われます。

これは古代から中世の葬儀に共通しているのですが、死者を葬る儀式の中心は、その人の生前の罪の贖いということでした。いかにして人は、この世から天国へと行くのか、そのための手段として、主の晩餐式が行われたのです。この主の晩餐式には、死者も共に参加していると考えられていました。

人々は求めて、自分の墓を殉教者のそばに作ろうと望みました。これは殉教者にあやかって、自分も天国に行けるかもしれないと考えられたからです。アウグスティヌスは、このような俗信を否定して、殉教者の傍らに葬られようと、あるいは墓さえも作られなくとも、当人の救いには関わりないと述べています¹⁵⁾。

殉教者への崇拝は、彼らが葬られた墓地や、彼らの殉教した場所の近くに、彼らを記念した礼拝堂（memoria, basilica）が建てられるという風習に発展します。そういった聖堂に巡礼することは、功德（meritum）になると信じられました。

死後三日目に、（キリストの復活にちなんで）死者のための礼拝が行われ、七日目あるいは九日目に死者の記念会がありました。30日目にも祭がありました。これはモーセのためにイスラエルの人々が悲しんだ日数です¹⁶⁾。5世紀当時、最も盛大なお祭りは、死後一年目の命日に行われ、教会で主の晩餐式が死者のために行われました。晩餐式の後には盛大な宴会が行われるのが決まりでした。アウグスティヌスはこうした宴会が死者のために行われるのは認めたのですが、たとえば殉教聖人の記念日のためのお祭には、大勢の人々が集まっててんでに宴会を開くものですから、それが乱痴気騒ぎになるのをやめさせようと苦勞しています。

こうして、生者が死者のために主の晩餐式（聖体の祭儀）を行ったり、死者のために祈ったり施しをしたりすることは、死者の状況を改善することに力があると考えられました。アウグスティヌスもそれを肯定しています。ただし、それは当人がその生涯の間に正しい信仰生活をしていた場合に限られ

15) Augustinus, *De cura pro mortuis gerenda*, 18, 22 (PL 40, 591-610).

16) 『申命記』34章8節。

る、とも述べています。そして同時にアウグスティヌスは、当人の信仰生活がどのようなものであったのか、本当のところは誰にもわからないのだから、教会はすべてのキリスト者のためにこの祭儀を行うべきだとも述べています¹⁷⁾。

後にもう一度述べますが、古代・中世における葬儀の神学の中心的な主題は、死者当人の救済ということです。いったい、教会の葬儀は、死者を救うことができるのか。もちろん、死者を救うのは神さまご自身だけだということは、わかっていました。しかし、教会の葬儀は何か、この神さまの救いに関係しているのかどうか。教会では生者が死者のためにとりなしの祈りを捧げるわけですが、それはたといいくらでも死者の助けになるのかどうか。それが彼らにとって中心的な問題であって、アウグスティヌスはそれを問題にしているわけです。

4. 中世における葬儀

この死者のためのミサはやがて発展して、中世には、死を前にした重病人のためにもミサを行うという習慣になりました。ローマ教会典礼書 *Rituale Romanum* によれば、広い意味での葬儀の中に、一連の多くの儀式が含まれることになります。それは以下のようなものです。

- ① 死を前にした悔悛 *poenitentia*
- ② 聖体拝領 *Eucharistia*
- ③ 秘跡としての終油 *unctio extrema*

死の瞬間には、「汝の手にわが霊をゆだねます」（ルカ23, 46）あるいは「主イエスよ、わが霊をとりたまえ」（使徒7, 58）が唱えられる。

- ④ 死の後に、聖水が遺体にふりかけられ、「深い淵の底から、主よ、あなたを呼びます」（詩編130編）を、司祭は死者になりかわって唱える。

- ⑤ 通夜

17) Augustinus, *ibid.*

⑥ 教会への移送（聖職者の掲げる十字架を先立てて、行列をつくる。後期中世から近代には多くの司祭や修道士、貧者たち（施しを受ける）が加わる盛大な行列になった¹⁸⁾）。遺体が司祭の場合、足を会衆に向けて、平信徒の場合、頭を会衆に向けて棺が横たえられる。

⑦ 死者のためのミサ（狭義での葬儀）

いわゆるレクイエム。

続唱 *sequentia*。聖書朗読および、*dies irae*（怒りの日）

葬儀説教（省略することも多かった）

免罪の宣言「われを永遠の滅びから解き放ちたまえ……」

⑧ 墓地への移送 *in paradisum* の交唱

⑨ 埋葬式

墓の祝福

棺に聖水をふりかける

香をたく

棺を墓穴の中におろす。「地よ、お前のものを取れ、お前は土だから土に行くのだ」。

土をふりかけ、詩編が朗読される（Ps. 42；118；130；132）。

祝福の祈り（*bebedictus*）（Lk. 1,68 以下）

ヨハネ11,25の交唱

⑩ 三日目、七日目、30日目、一年後の命日における追悼ミサ

ローマ教会典礼書¹⁹⁾に出てくるこれらの儀式的すべてが、一般に行われていたのではありませんし、場所や時代によっても大きな変化があります。特に、貧しい人々の葬儀は、ごく簡略化されていたと思われます。また、そもそも教会での葬儀礼拝そのものを省略して、直接、墓地で葬儀を行うこともありました。現在でも、墓地あるいは墓地に付属するチャペル²⁰⁾での葬儀は、欧米ではごく一般的であります。

18) アリエス『死を前にした人間』143 頁。

19) TRE, S.744f.

古代から中世にかけてのこの葬儀の発展の歴史をみて、現代の私たちとも異なるのは、葬儀の様式やその背景となる神学の中心は、「死者本人の魂の救済」だったということです。近代に入って、宗教改革の教会では、葬儀やその他の死者のための捧げものは、神さまの救済的手段ではないという神学が確立しました。たとえばそれは、免罪符のために教会に献金したところで、死者の（煉獄における）状態を改善できるわけではないという、ルターの「95箇条提題」（第27条）にはっきり現れています。莫大な費用を教会に支払って盛大に葬儀をしたりしたところで、たとえば王様が死んで国じゅうが喪に服したとしても、それは「本人の救い」ということには縁もゆかりもないことなのだ。むしろ大切なのは、その人がどう生きたのか、どんなふう生き、どんなふう信じ、どんなふう人々への隣人愛を実行してきたのか。それをルターは問題にしたのであります。

中世の教会の典礼においては、「死者の魂の救済」が主題でした。そのことは、二つの事例がはっきりと示しています。ひとつは、*tumba* と呼ばれる、ひつぎの形をした石盤の存在です。これは、地理的な事情で、死者の遺体を教会に運ぶことが不可能であった場合に、ひつぎの代りに教会の中心に置かれたものです²⁰⁾。葬儀の儀式においては、死者自身がそこに参加していることが必要でした。というのは、彼は司祭の口を借りて、神さまに悔い改めの祈りをするようになっていたからです。その代表が詩編130編 (*De profundis*) の朗読でした²¹⁾。

「ああ主よ、われ深き淵より汝を呼べり、

主よ、願わくはわが声をきき、汝の耳をわが願いの声にかたぶけたまえ。

20) このような墓地付属の礼拝堂としては、パリのイノッサン墓地のそれが有名である。そこには、キリストの身代りとなって殺された幼児たち（マタイ2章16節）の聖遺物が納められていた。ヨハン・ホイジンガ『中世の秋』第1章、第11章（中公文庫52、296頁）参照。

21) TRE, S.745.

22) 詩編6編、32編、38編、51編、102編、130編、143編の七つを「悔悛詩編」と呼び、葬儀のみならず、臨終、埋葬などの典礼の中でよく用いられた。ノルベルト・オーラー『中世の死』（一條麻美子訳）法政大学出版局2005年、80頁以下参照。

主よ主よ、なんじもしもろもろの不義に耳をとめたまわば、誰かよく立つことをえんや。

されど汝にゆるしあれば、人におそれ、かしこまれたもうべし。

われ主を待ちのぞむ、わが魂は待ちのぞむ、我はその御言葉によりて望みをいだく。

わが魂は^{えじ}衛士があしたを待つにまさり、

まことに^{えじ}衛士があしたを待つにまさりて、主を待てり。

イスラエルよ、主によりて望みをいだけ、

そは主に憐みあり、また豊かなるあがないあり、

主はイスラエルを、そのもろもろのよこしまよりあがないたまわん」。

この悔い改めの祈りに答えて、教会は死者の魂を祝福し、彼ができるだけ早く神の御顔を仰ぎ見る恵みにあずかれるように祈るのです。ですから、死者がこの葬儀の典礼に参加していることが絶対に必要でした。そのために、死者の遺体の代りに、いわば死者の魂のあり場所として、tumba が教会の中央に置かれたのであります。

もうひとつの例は、終油の儀式です。12世紀ごろから、教会における秘跡 sacramenta が整理されて、七つの秘跡が、神さまが人間を救う手段であるという教義が確立するのですが²³⁾、この七つの秘跡には、教会における葬儀の典礼そのものは含まれていないということです。七つの秘跡とは、洗礼 baptismus、堅信礼 confirmatio、聖餐 eucharistia、悔悛 poenitentia、結婚 matrimonium、終油 unctio extrema、叙階 ordinatio でありますが、この中に含まれるのは、葬儀の全体ではなくて、むしろ葬儀の前段階としての病者の額に塗油する「終油」の儀式でありました。司祭が臨終に間に合わない場合、この終油の儀式は死後に行われることもあったのですが、とにかく、神さまが死者の魂を救ってくださるその手段とされたのは、臨終の翌々日やあるいはもっと後に行われた葬儀ではなく、死のまさにその時に行われた終油の儀式でした。本当は葬儀そのものを秘跡にしたかったのだらうと思うのですが、

23) Petrus Lombardus, *Sententiae* が初出と言われる。cf. Thomas Aquinas, *Summa Theologiae*, III, 65, 1.

本人が亡くなってから教会で葬儀が行われるのに、たとえば王様や何かの場合には数ヶ月かかる場合もありえます。その間、神さまがこの人間を救うかどうか、棚上げにしておくというのも妙な話ですから、葬儀の本体ではなく、終油が秘跡として選ばれたのだと思います。いずれにしても、このことも、中世の人々にとって何よりも大事だったのは、死者の魂の救済だったということの意味しております。葬儀はこの神さまの救済を追認し、教会の儀式として表現することに集中しています。

5. 宗教改革の教会

これに対して、宗教改革の教会においては、葬儀はサクラメント（救済の手段）ではないということが確立しました。サクラメント（秘跡）として残ったのは、バプテスマと主の晩餐式の二つだけだったのですが、今日ではこれら二つも、たとえばバルト神学においては厳密には救済の手段ではなく、ただそれを表現する信仰告白のひとつの形だとされています。人間を救うのはただ神さまの憐れみのみであって、その意味で、厳密に神さまの救済の手段 *sacramentum* だと言えるのは、イエス・キリスト御自身だけであります。

中世の教会には、聖なるものが一杯あったのです。聖書、聖なる教会、七つのサクラメント、それに使われる香油や聖水、聖体やぶどう酒、数多くの聖人たち、その遺物、数えあげればきりがなほ、人々は聖なるものに囲まれていました。宗教改革は、これらの聖なるものを相対化しました。聖なる方は神さまおひとりだ。神さま以外のものを聖としてはならない。そのような考え方の帰結として、葬儀もまた聖なるものではなく、また死者を聖化したり、天国に送り届ける力のあるものではなくなったのです。私たちはそのような、宗教改革の教会の末裔の中におります。

葬儀の内容にもそれは現れておりまして、私たちの教会では一般に、この葬儀によって、あるいはこの葬儀において、死者の魂が救われるのだとは考えません。また葬儀は死者の魂の救いを表現しているのだとも、あまり考えません。それでは葬儀は何のためにあるかといえは、かなり多くの牧師が、

それは「遺族の心の慰め」のためだと答えるのではないのでしょうか。マルコ12章27節「神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神なのだ」、あるいはマタイ8章22節（ルカ9章60節）「死んでいる者たちに、自分たちの死者を葬らせなさい」（死者には死者をして葬らしめよ）を引用して、葬儀は、キリスト教の伝道的手段だと言い切るドライな牧師たちもおります。

しかし、もし本当に「本人の魂の救済」ということが葬儀と何の関わりもないのだったら、いったい葬儀をするという意味は、最終的にはどこにあるのでしょうか。またそれでは、本当に「遺族の心の慰め」になるのでしょうか。福音伝道と言いますが、悪くすると、教会が自分の利益のために、死者や遺族を利用したということにならないのでしょうか。ですから、死と葬儀を考えるさいには、どうしても神学が必要だと私は思うのです。

6. おわりに

ここから後は、私の任務であります教理史を紹介するということからは離れてしまうのですが、最後にひとつだけ、葬儀というものを牧師はどう考えるべきかについて、私は自分の意見を申し上げたいと思います。

今日でも、葬儀を司る牧師は、死者の魂の救済ということを信じていなければなりません。イエス・キリストはこの魂を必ず救ってくださる。そのことを信じ、また祈るということが葬儀の神学やその説教の中心になければならないと思うのです。葬儀そのものに何か神秘的な力があって、魂を救うものではありません。そのようなことは、中世の教会ですら主張していませんでした。しかし、葬儀というものはどこかでこの「本人の魂の救済」、神様のもとでの「魂の永遠の安らぎ」*requies* というものを信じ、それを語り、それを表現するものでなければなりません。

アウグスティヌスがすでに5世紀の初めに言ったことなのですが、教会はこの一人の死者の魂の救いについて、何かはっきりした客観的な証拠とか確信が持てるわけではありません。その人が本当はどういう人間であったかということは、誰にもわからないのです。本人にもわからなかったかもしれな

い。ただ神さまだけがご存知である。ですから教会が語るべきことは、神さまはこの一人の魂を愛してくださったということ、そしてだからこの魂は引き上げられて、今は神さまのもとで安らぎを得ている。それを自分たちは信じているのだということです。

遺族の心の慰め、グリーフワークということが実践神学者からよく言われますけれども、それは結果として出てくることであって、それを意図して葬儀を演出しようとする、どうしても葬儀はいやらしいものになります。演出がうまくあたらばあたるほど、いやらしい。心理学は神学の代りにはならないのです。

葬儀の説教において語るべきことは三つある、と私は神学部で学生に教えました。ひとつは、その故人の生涯を想起する、心に刻み付けるということです。想起すると言っても、故人をほめたたえたり、どんなに素晴らしい人柄であったかを語る必要は、必ずしもありません。ただその人が人間として、一人のキリスト者として、一人の家庭人として生きたということを語ることであります。故人の生涯を伝記のように長々と語ることは、考えものです。葬儀の説教に許された時間はせいぜい10分ぐらいなものですから、そんな時間ありません。むしろ小さなエピソードのようなことが適当だと思います。

二つ目は、神さまの救いということです。イエス・キリストの十字架に私たちの希望があるということ、主は私たちのために永遠の安らぎを準備してくださっているということ、だから死は終りではないということが、葬儀の説教では語られます。

第三は、遺族たちの心の慰めに関わることです。故人の生涯を心に刻み付けて、その意志をひきついで私たちは生きていくのだということが語られます。家族にとって大切であった一人の人が、今失われた。その人の不在を埋めることはできません。ですから悲しみはある。しかしその悲しみを越えて私たちが生きてゆくときに、私たちはその人にどこかで必ずもう一度会うことができる。その希望が語られます。

神学的な問題として重要なのは、ここでのことがらの順序であります。葬

儀の歴史の中で、本人の魂の救済ということから、家族の心の慰めへと重点が移ってきたということがあります。それは近代になってからも続いている世俗化のプロセスであると思うのですが、私は現代においても、本人の魂の救済ということが葬儀の神学の中心でなければならないと考えるのです。それは何も、葬儀をするから救われるのだという意味ではありませんけれども、葬儀はどこかで、神さまの救済を告げるものでなければならない。また、だからこそ家族の慰めもあるということなのです。この第一と第二の順序が大切なのだということ、それが逆転してしまったのでは、キリスト教の葬儀も、葬儀場、葬祭場を初めとする様々な葬儀ビジネスと本質的には何も変わらないものになってしまうであらう。